







ハ世々此のつてもハ幸垣乃無くて  
多く叫ぶる素とお座る人乃  
あゝハ昔ふ書や五抄ハぬ、是れ  
ハくさきハ、いふれ、とく、あきつめて  
此這里れ、うき、うさ、いふ、あゝ、大  
すれ、歌、よめ、ん、人、つ、ひ、あ、者、ハ  
ぬ、ハ、玉、乃、古、く、流、の、筆、を、い、ら、れて



暖月乃るの都いひんよふり  
よきそられけり

かきふ

唐む楊女

竟又 癸丑のとし  
初め

闇雲抄をちりそをふ引

六金羅大に社盟は河川ふ寝語行美憐ぬ一乃うは  
をける。帳秘ある成。たのれ請求く。むき向あふ。岩清有。  
はくもあふ。父系。もく子まるとれ。さし。伊豫の湯々。さ  
よみもあふ。うふ。あむ。おほゆふま。の。軽く乃。詞をそく  
加ふふあふ。うお。戸。おひの。を。れ。あ。え。お。あ。い。と。お。あ  
は。く。よ。さ。み。よ。様。あ。ふ。む。く。の。を。ち。く。む。り。す。ね。を。寝。語。行  
の。つ。く。く。う。こ。み。い。か。さ。ね。て。う。し。れ。く。ま。と。の。を。あ。ま。さ。ま。の。  
あ。は。う。い。れ。小。伎。子。あ。ふ。い。十。と。せ。あ。あ。つ。の。む。う。あ。い。そ。  
一。つ。少。手。の。遊。戯。あ。ふ。う。い。や。い。巴。人。の。鄙。曲。を。出。く。湯  
其。の。高。綱。よ。あ。く。披。そ。う。う。い。手。の。名。を。う。て。傳。ふ







廿八 三月三日  
廿一 款冬  
廿四 蕤  
廿七 三月盡

卷二夏之部

一 更衣  
四 殘花  
七 葵  
十 早苗  
十三 五月雨  
十六 螢

廿九 牡若  
卅二 蛙  
卅五 雲雀

二 首夏  
五 新樹  
八 時多  
十一 照射  
十四 魚橘  
十七 水鷓

三十 菘花  
卅三 躑躅  
卅六 暮

三 夕花  
六 牡丹  
九 菖蒲  
十二 特河  
十五 瞿麥  
十八 蚊遣火

廿五 夏月  
廿二 夕顏  
廿五 夕立

卷三秋之部

一 立秋  
四 七夕  
七 秋  
十 蘭  
十三 野分  
十六 槿  
十九 月

廿六 夏草  
廿三 蟬  
廿六 納涼

二 早秋  
五 草花  
八 女鳥花  
十一 雁  
十四 重後  
十七 秋夕  
廿 鶉

廿一 蓮  
廿四 冰室  
廿七 荒和拔

三 殘暑  
六 萩  
九 薄  
十二 鹿  
十五 霧  
十八 約迄  
廿一 時



廿二	廿五	廿八	一	四	七	十	十三	十六	十九
秋田	菊	紅紫	初冬	雨	雪	子	綱代	符	埋火
廿三	廿六	廿九	二	五	八	十一	十四	十七	二十
攝衣	九月九日	暮秋	霜	寒	冰	神樂	炭竈	歲暮	
廿四	廿七	三十	三	六	九	十二	十五	十八	廿一
虫	葛	九月尽	殘雪	霰	冬月	水	佛名	除夜	

卷四冬之部

一	四	七	十	十三	十六	十九	廿二	廿五	廿八
魚	初冬	綱代	符	埋火	魚	魚	魚	魚	魚
二	五	八	十一	十四	十七	二十	廿三	廿六	廿九
初魚	待魚	後魚	思	園魚	新魚	於魚	久魚	忘魚	知魚
三	六	九	十二	十五	十八	廿一	廿四	廿七	三十
忠魚	魚	魚	斤思	見魚	別魚	坊魚	近魚	終魚	等思友人魚

卷五魚之部



七	四	一	卅九	卅六	卅三	卅四	卅七	卅一
露	海	曉	寄紅魚	寄玉魚	寄香魚	寄水魚	寄山魚	思三人魚
八	五	二	卅五	卅七	卅四	卅一	卅八	卅二
群	山	松	寄弓魚	寄糸魚	寄獸魚	寄木魚	寄園魚	寄天魚
九	六	三	卅八	卅五	卅二	卅九	卅六	卅三
澗	苔	竹	寄双魚	寄魚魚	寄竹魚	寄火魚	寄風魚	寄地魚

卷六雜之部

十	七	四	一	卅五	卅二	卅九	卅六	卅三	十
六義	子承と系	片頭	狂哥身由	述懷	寺	揚貴妃	老人	旅	信
十一	八	五	二	卅六	卅三	卅七	卅四	卅一	十一
十群	三群	債頭	狂の一字	祝	神紙	夏	拵女	田家	関
十二	九	六	三	卅四	卅一	卅八	卅五	卅二	十二
鮎用對	皮肉骨	落歌	題取後方	懷舊	在常	王昭君	山家	別	

附錄



十三	禁忌	十四	七種菜	十五	鞠場四木
十六	承香殿四傑	十七	新六哥仙	十八	利小童五人
十九	五婦人	廿	三條三世	廿一	三部書
廿二	六国史	廿三	二十代和哥集	廿四	萬系假名
廿五	古狂哥書	廿六	今狂哥書	廿七	五行五題
廿八	五味五歌	廿九	六根六首	三十	七夕七首題
卅一	重陽九首	卅二	十界十歌	卅三	十如是十題
卅四	十二夜十三題	卅五	十五夜十五歌	卅六	堀川太帝百題
卅七	堀川次帝百首				

同録畢

蘭雲愚抄卷一春之部

一 年内立春

年の内あるまゝ 一とせよ二とみえり  
 とくをこめてんり 一とせよ二とみえり  
 春とせよとれ冬 書の内よりなり 冬かうらなるる  
 伊勢暦との内外乃相のふおねおまにまのまのま 眞歌  
 春とせよ春年の内因に一徳利を酒とやらん彩はるやらん 金時

二 五法

ふりま ころり 一はまたり 一やえらん あり玉の 一万代の 一  
 一とせよ 一様り 一 漢とらり 一 春の衣 一 春の衣



赤代のま川ー ーとあり ーあれや 花のー ーはあらる  
鹿をむら 天のまは光 佐保唯のま渡のま 高れま川ーと  
を教へたまは道のまはたふれたまはま字よりま智まうま 定光  
ま科にあらうまはまはままのまらう 鏡打ままらう 光

三 元日

掛をとうむ夕にまつ免れ帯ま今教へあまふ元日 軽人

四 早春

葉のよふまはみめてうつくしくまあうまをふまあふ 版

五 初春

うらたあまきまやこまのま大ねま解の使れまうまらう 金結

六 子日

ま月ぬの日ーのまひめ小松 まらぬの松 君まあにひく 孫まの小松  
子代のま先 松の子ま まのまら 芝ぬの松 ひくまの孫ま  
春日孫 子代のおま 龜の尾山 まま山  
清教まあまぬ子日れ唯小松 赤ま屋のまままま 仲住  
女衛ままやまらめんまままま松を引くまぬまハ 兼入

七 若草

ま月まか ーつむ 孫まのー ままのまま 雪まれ ーまのま  
涙のま 雨まれ ー まままか ー りまら ー 朝の孫ま  
大まや人 孫ま まらる系 古孫 ま日孫 赤火孫  
春日孫の花火まらうままままままままま 赤良  
つままはまあまらま白拍子まままま西のせんまのま 橋



八 旅

うまふまゝ一ハまゝ一初一 朝一 夕一 一ツツ家  
一こむか 一の衣 一まらぬむ うす一 一をむら 一む暖  
一む夕それ 一の暮 外山の 一た 一ち 一ふひく 千原の雲  
初夜帯子や短く 夕まほらふ 一あらぬの山けら 一と 裏往  
まほらひらひてお 一三保の浦松 一千原の衣わ 一とや 書丸

九 雪

うらひを 一を 一 一をよ 一の氷 洞 一は 移ら 朝の 一  
雪の 一 一まふく 一 雪の 戸 出 一を の 一羽 風 一も 一ふ 一く  
あふふる 柳の花 一ま 朝 一う 一あ 一し 一え 一名 一を 一の 一雪 一  
力を 一も 一れ 一に 一氷 一成 一と 一と 一あり 一なく 一雪 一れ 一了 一の 一と 一く 一又 一ハ 一美 一佳

雪の行は生まれし地をうらむ色の中うれあいの初とま 横濱

十 除寒

まふまゝ 一ま 一え 一ふ 一を 一ま 一ゆ 一ま 一と 一も 一あ 一ら 一に 一を 一ま 一や 一ゆ 一  
初雪を 一 一雪 け の 一は 一は 一は 一ま 一れ 一初 一を 一初 一ま 一の 一あ 一ら 一  
千原の 一ま 一つ 一と 一ぶ 一く 一と 一ま 一と 一ま 一は 一を 一ま 一た 一山 一の 一積 一も 一と 一て 一左 一原

十一 残雪

あは雪 一雪 の 一む 一う 一ま 一え 一野 一庭 一の 一雪 一間 一去 一途 一の 一と 一と 一  
あれ 一と 一た 一ま 一ら 一に 一ま 一え 一や 一を 一た 一山 一う 一け 一雪 一う 一け 一雪 一れ 一下 一茶  
あつと 一野 一鶴 一毛 一は 一似 一と 一か 一雪 一あ 一は 一今 一と 一び 一く 一残 一る 一山 一の 一を 一桃 一成

十二 美州

このころ 一海 一庭 一の 一 一雪 一の 一 一の 一ゆ 一ら 一 一れ 一つ 一ま 一雪 一万 一の 一



草のまろり うらうら ありまろり 香れりえ

生碎ハ縁トけよるもろもろにを結り人よそをねりお 櫻御

十三 梅

むめ の死ハれー 春のー 垣ぬのーー ーえ びよのー 老木のー

ーのぞえ 袖のーぐ 風のーうま かげれー 白ふあさう 影のー

白ふま 詔波 小浜 高津 くらふ山 梅は

縁波はをぞふとまのさか子も春の白ひのまぢの梅 金持

とまてしつうくられくー 袖とあちうらたは群路の梅く 美能

十四 柳

やあきー 糸 春ー 春のー 花のー けのー 門のー 又木のー

ーたふかー ーの髪 風によろろく せめてみるあく おひく

みとりのすめ かのいと くらふ 穢沢の池 くられきー

兼死子似さか柳をうめー 梅く 浮世のちうとまらた出え 金持

甚風よこさつりれて青柳のめれあかほとをさう記をする 佐倉

十五 早蕨

さつてひー 出ふ 松の下つてひ 甚のー 苦のー 手折ー

かとうら下 山つと 路をゆく くらふにわぬ 甚日浮 袖ふる山

佐保飛の涉ぬ山れ脊をうけくむと門巴子中りさつてひ 金持

ゆえ物とみとりの子の子れあだくやあははてく甚のさつてひ 吉美

十六 花

ーのたひとー 襟衣かきれー ーれ下ひも ーの枝折 ー乃雲

ーのたひとー 襟衣かきれー ーれ下ひも ーの枝折 ー乃雲

ーのたひとー 襟衣かきれー ーれ下ひも ーの枝折 ー乃雲



みよし野 初瀬をく不山 ありし山 喜相山 大ひえ 清み  
 大井川 高橋と山 かつらき山 ともら山 ありし川の岸  
 よし野山 去色の枝折と見遠くうらけ 霞の花燈を定丸  
 見よ不風をあらふ山 さらさら花よふ夜の香る絲れし雲 橋脚  
 糸尚の版もむすし 様うさじあしていむよさうあひ 光  
 一よりをあらふのころ 絲りうて見る雲の動定乃か 喜相  
 入のうのみせまてくさくさ代よととも花をさか 裏成  
 ますふとたかふい 霞のかわか附様や花れ王と見申らん 猿人  
 入相の鏡よりけいこくえても風いふと花よらんへき 金塔  
 三度ふらぬよとあらはれむれい命いふふれ下にをあれ 狐積  
 けい事を思ひされ 花を暮るえんて見せさか 清みれ茶 東作

十七 春月

ねふらぬ 霞むぬの月 光とくさむ 霞むぬれま さらうにみあく  
 むつきの月 さらう紀の月 くるみよあくむ  
 くらふとも又もくとも一向に氣象けつぬ雲の夜を月金鶏

十八 春曙

くらむあけの 花の横雲 山のそさむ 山うらう 志の光  
 花よぬり 霞さむか 霞よあくむ 雲ののこる  
 那那の松とあちうさち風よさえて葉花の甚乃明不の光

十九 遅日

くれうた いとあある日 きれう日 橋にうら ひふ絲  
 のとらある風れをりくもあらん 甚の日掛れのひじつ 白壁



二十 遊糸

わさふいと ちむふいしゆふ 風よけ出は 春風のひまにわさふ  
暮の目へ次ぐは 照るもあそびきうら 一やんは けふ糸ゆふ 仲塗

二十一 春雨

本のおもろさあ くらもをろさあ 秋すのー 春風のー 草本もやむ  
新のいとあ 折の玉あ 花のま ばくくと ちむいづふふ  
ゆるゆるゆらん 春風よせくく  
千金のつれれいもとんやううふ小粒とやうてふもる暮さあ 万象

二十二 春駒

野への美的いさむーいさふ ちむるあき ちまね あさうの派  
伯樂々矣とすえとや放ちん暮の野相の約いさふなり 三絶

二十三 帰雁

けろと 帰るー ーの二つ けすにきゆふ けふふ雲井  
序のよつさ 花をえすと 紙路ーくふ 由良の戸次  
あー

二十四 雉子

あふさ事て 帰る 紙のよしと様もえはよいとく 一入金 雨付  
まをふく けを路のー つまふひ 不ろくふ 子をねりふ  
ありうあうぬ やけ路れきい 暖路路 暮日路  
ちむるにきいんをえんとて 暮れまよとや 鳴 美憐

二十五 喚子

あふさ事 人ー 心細く ちままれど 山ひと 人あは山



むしころを様ゆしてさくまふころあつてもいふくまふまふ 金持

二十六 苗代

あいらちあ 小田のおいら 綾ういー ままをま へ孫ま

ゆうあつ民 門田 子町田 多羽田

寒々筆のまふ紀不とにまふいらのふさをぼく水董の小田 音人

二十七 董

まこれるさ 野へのまこれ こひくさた あさちふ つぶさく下袖まつま

白ふすまこれ

吾妹子うまをくらけつふすまこれおをわけてつせとくらふと ぼん

三十八 三月三日

桃の重 花も花もや研 八重桃 くらふのゆら

川よりあつて艶艶のまふ山きたらうらう人の口まねをすれ 沖風

三十九 牡若

あふんちさ 比のー 浜邊のー 春こめく咲 白ふ川邊

けよささふ 三ぬま やいさー かりやうぬま

美しきうほやうぬまこれまふ山をこけやめのまをまをきまはすれ 定丸

三十 菘花

ふちあまー ーウらう ーうえ 由うけま ぶひうさた 思ぬまあふ

松の菘あま 菘うけう咲 甚日 任よー

さふ唯のつとぬらひしてけいまはうら吹や菘乃まけのみ 白人

松うえにまひうらうらふ菘の葉ままと甚と成まふたてを咲 人成

卅一 歎冬



さけふ山ふき 一の巻後 まじりー 口ふりのま いたぬま  
後集れ家あけりぬ 身あるひは馬の巻後ふ井ふ山吹 夕雲

廿二 蛙

小田のー すまーー 水は任ー 井ふれー  
古井のー 綾々門田 このまかのもにあく  
身とちぬかぬあらまそそと 智恵成古井に蛙あくし 東作

廿三 躑躅

ゆきー めちー 岩ねのー 岩ねのー 岩れー かつあき  
ともひ 志ふれ家 くらふ山  
宿うーせられあふ里の岩つー火とりー此の様をたうま 白人

廿四 燕

つをうー 斬れー かーー 中へ成つまれぬ ちかすまふぬ  
ねとめとあふふ とまされた  
つをうも何たるのあつらんやうにうか指乃はうさう

廿五 雲雀

あがふひをり 葉ひをり ねるひをり すも群のひをり 夕ををり  
ーのーと 雲井ふあふか 魚腹とすまふ 魚腹よきあふか  
群よ白ふ畑の草れあひをり色をとまうにきだむをふかうせ 天長

廿六 暮春

くれゆくま 暮のつれ 暮あけらん 暮候うむ やまのれ  
死るのかろり すこらんま 志むくまを



千金より一とある日の日も一とありにあらざる

卅七 三月盡

其れとちり一とちりかくるを 入相のうね ちちれれをころそ  
をいむ甚 いぬふ甚 一のふれ甚 ちちれれにゆく  
おせにく甚 衣の袖れつれ 甚しひ久せ  
三月のつと重し一ちのふれ給ふけぬさりの甚しうなる 不時  
なよひも亦りの夜合すぬぬいふうれをさし花のこほ 岡持  
花ちりて甚しひくうのういつちつてけく春のよまふを 光  
甚しふねきりたるけ灸上戸とくつとつひひをさる 漢江

蘭雲愚抄卷二集之部

一 更衣

おつ衣 いえのー せいのをー 花をー かぬこー 衣のー  
花のこつと ぬきうろ ぬきうて ちかのまのこを  
きのふれ甚 甚しうおき けさうろ

花のまをわしそらふは久ぬを給りぬと人やころん 正式  
おのふ成とわし被よつとふの衣れあをせりのあり 軽人

二 首装

卯月のちりめ 花巻のこくれ 衣山のま ちりのこふたれ  
甚とれしきのふ 衣の巻よらり 衣やきのらん 甚と甚



あまふとよ ときをらうら 春つー 涼しとそふゆ。

春ふれしきのふりほれぬあうらうらふのうきにぬきゆくは曉月  
花はふかきうらうら大根とありぬじ松葉は似るふの横雲 金埒

三 卯花

まけふうれをか ころもー ばふー 垣のー 春のー きーのー  
山ふのうきぬ 川あうぬ香 春ふとふれー ませうた ころ  
山ふのき 一むらうきける 月影さすふ

月香とるら葉露は隣の皮むくのきーにさのころれを 直ぬ  
若根山打まうのきの花をまふうすく人を川ひひく 裏住

四 残花

ちりのころ花 春のころにのころ 春ふ香のときをらうら

咲ぞれうら 青葉に白ふ ころもー 白ふ ころもー  
ちふりたころれを 春とーのー

花は根をぬじたのふ山にさうらうらうらうらうらうら 智恵  
ふ山のころうれさぬふぬひけー花は紅葉の針さたうーんぬ 栲樹

五 新樹

青葉ふ 春ふま 春葉のころと 花のあと 春のー たす  
ちけふまは うれくころれまうら 山のねらうら

花の山白ひあうらの春ふとくまふふとらうらと春ふけらふ 新鹿

六 牡丹

ちのう草 あうら草 春とら草 春白草 花のころみ  
十日つ春とふとに咲けし花やうらうらまふふくさ 赤良



詞苑集を撰文よしてあつては件のごとくはらるるより 金雞

七 葵

あふひ草 のろちく山 世にあふひ草 かなあふひ 二葉草  
か茂のよあれ こすれあふひ かさ草

名の名れ鴨のふあれのあふひ草をそめてくけり袖こそあつたる けん

八 時鳥

を所なくまは 山一 かく一 里の一 志ての回を名  
のふ志のひね ふうかく里 雲井よは 雲の月 あくやひ月  
たのう八月 ねらうとあく 一丁あふひ ねらてま 秋すのよ  
不のうよあのも 湖しを白くあく むらぬのそく 今ひとあふ  
るをよともしに まちぶ山 若らう あふ坂 山田のさく

後 伏見 むき一 所 忍の思 あさく ま里 小所

湖を自由自在よまき里へ酒をへ三里さうゆへ二里先  
すまのきちひあねやゆりすて笑ひ一山よあくなくまは 三徳所  
あれとふすもあうそ乃 湖を雲のつ川よはまあうそ 采人  
湖を次々の浦ていあふれもりれをす川をせむぬのえ 橋ゆ  
初花子花ちあ里れなくまはちひあねも一日のあけ 美航  
れもひれもさうそくまあふひの合がらりきくおくまは 金雞  
お母子よ入さの山乃なくまは一口あふひのま口をまあ 全  
湖をあうさく里とけはよあし只一丁志の今乃さうゆ 院所補  
湖もよ帆をおけくすさうなくまは沖をえさる今の色 萬来  
あふハさくさく乃をさふひまあ ねくは子あふひまあ 右政



九 菖蒲

あやめ草 白ふー くのー 朝のー 一の香 一の香  
ふく ーかほら 花ー 池のー 沼のー 川毛ワメ  
のきれすんく のきたふく あさるれ派  
お政よあしぬもあひひきく入てあやめを朝乃妻ーいんろ子未得

十 早苗

ささき ーとふ ー系 小田のー 山田のー 民のー 子町ー  
門田のー 荻の小差 ぬせきさく 山田のち川 すとくかふ  
田子の浦 住よー 井手  
妙の女も子苗とあよへりあよくあしぬあまのふさ系流 居住

十一 照射

ともー 一のうけ ーすふ のこふー ちまのー 一の光り  
入月山 麻のちひひ よふ麻 麻さ川 枯人のつー 入山  
二村山 むさくし  
竹葉虫のもくひありふを棹麻のそとよりれあまうあしる

十二 糟河

うまぬ 衆川 うまぬ かしこ 夕やき ぬく新 曉やき  
さあらかし火 糟川うまぬ 大井川 かつく川 高瀬川  
もくく川 宮川

のませてい船をうせてとる魚のはまきりかつぬけふう川久 二巻  
世ワうの浦ま乃小船のはかてよると特ハ咽首れつかや興しき 佐々

十三 五月雨



まこられ ーの夜 ーの目とある のきれー ーの目とある  
うらぬー 海のー あまらる けくさ けくさ さまとあり  
けくさありき ちやの朝 ちれやうぬさ あり川  
まめの浦 ちかの言はー たののあ 佐所の舟橋  
布引はあうたさる月雨ひと暢むろくちあう橋つち 金鶴  
初職あてーし子よるさせりあやうらこちあぬ夜の月夜 豊成  
さくこれの雲れ衣の雲を渡さう川ひさせよてさく 法師 江住  
雨の音午の天先とありーきて五月の雨のうぬれてさる 次丸  
ゆくあらの甚さけーしん見よるもかて音まんさーんぬのぬ 後橋  
新道く雲さうれと回ふ入のすれもさぬぬしみあれのぬ 遊羅橋

十四 遊羅橋

あちをか ちかー 白ふー 朝のー ーのむらり里 ちまこえ  
むささる 世ののうと 移り音 橋は白ふ たう袖の音 むうとあふ  
菓の大將とろそえんよけしまうひつろりのたちをか乃乃 秋人

十五 瞿婁

とこかつ 白ふー ーの花 ーのあ 群へのー ちてーと  
あまこあうと ちあねもけある 花のぬれうね つゆの中うらふ  
あまこあふ あくのあふ ちやき群 曇日群 ちまあ 片思  
と死怖り夕のあこれたのうにけちううつらあてーこのむ 漢登  
のらあてもまこあうちたあてーこのちとをかれてハあなれてさある 白壁  
すくられてひらう音のたううこれあもつらぬ川系あてー子 けいん

十六 螢



とぶほろろ ーのもは もやー ちかー ーあうー ちのー  
波のー 浪色のー まとのー 舟をうー その光 きぬぬ  
書きそぬ いぬぬ 宇治川 宇治川 ちか ちか ちか  
世の中れぬもほろろきかれや金も曇りぬくはくぬ 秋雲  
名のつじ源氏の恩やすれぬ光をあらにーけるわらわ 向

十七 水結

ちくろあか 秋まのー ーの書きぬかろろぬー ーのー  
まのの戸 ぬさあふ ある戸 竹田の里

十八 蚊を火

かすり火 よそのー 志川ー 里のー 岩のー ちやうく

ふせたりやこ ふせやのうやう 下むぎ

夕ぐれに三輪の枝の葉おきて行けぬとなくや蚊を火 秋麻

十九 夏月

月を涼しき あけやをたね 四つこーの秋 みるみる月  
出れへあふか 四か夏のみ 夏のすれぬか 夏の夜に霜  
夏の夜は月のさーよとていそぐれて露のこころに残るあふき 遊人

二十 夏草

か門さのもふ ーれぬと 夏草の草 夏草の草 秋まらぬ  
かろろの草 空とらふ草 草のーけり

旅人もふけよ安なるあやよ花のちかひふさげもねふゆり

廿一 蓮



もちまゝのあま ちののちまゝ ちまのまじを ちまらわく  
ちまれけりまゝ ちの中らけ ちまのつと ちま凍り  
ちまの壁のけりくえゆり蓮葉まはさちちくととくちま夜 秋人

廿二 夕顔

夕顔の名 一の朝 一のあま さけり垣ぬ まられてゆく  
あつち垣ぬ ちまらあうさ ちまの袖うた ちまぬまぢま  
夕顔まらぬのまらうと川のちま千鶴とあうそまらうえま 金鶴

廿三 蟬

せまのまらも 一のちらえ 一の泪 こくれえくれ ちま清か  
あうちま風あられと合款のちまねあうちまね蟬の色 景好

廿四 氷室

ひいら山 一のり ちまの氷 とけんとちまあま ちま田もあまぬ  
ちまの外あう 枝の下風 涼山のうけ ひむらのたわし  
謎くやあまやひむらりちま月へくけてもちまはちまぬあま 景好

廿五 夕立

夕立の雨 一の雲 ちまちと晴る ちまの音 風をちまよまちあひ  
山風をけり ちまあうり ちまれりちま 朝の玉ま ちまもあひく  
夕立の雨のちまちまいれんとちま 盤とちまにちま出してちまちま 金鶴  
天の口あうちまちまけりちまあまちま天りちま水をちまちま夕立 三取

廿六 納涼

夕涼門 一の夏のちま ちまふ秋風 ちまのちまちま ちまのちま  
ちまのちま ちまのちま ちまのちま ちまのちま ちまのちま ちまのちま



足跡よのこし下跡よのたぶくと浅深水の歌てまじくも  
あつきよて解しつらきとめつこのこくひま清水の歌をすしき  
涼と身らふと命のせんごとくあささあくのりはけよけそ

廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七

あつちりへ ふうのちりへ ころたすり ころ月もへ  
とそた川 あつよこの林 波のきりあふ ちよしそ 麻の大ぬこ  
あつのつれ あつの小川たつ辰 加茂 いす川 任よし  
あつちりへ ふうのちりへ ころたすり ころ月もへ  
あつちりへ ふうのちりへ ころたすり ころ月もへ  
あつちりへ ふうのちりへ ころたすり ころ月もへ

闇雲愚抄卷三秋之部

一 立秋

秋の月日 秋の来より 秋の月日 秋の来より  
秋の月日 秋の来より 秋の月日 秋の来より  
秋の月日 秋の来より 秋の月日 秋の来より

二 早秋

早秋の月日 早秋の来より 早秋の月日 早秋の来より  
早秋の月日 早秋の来より 早秋の月日 早秋の来より  
早秋の月日 早秋の来より 早秋の月日 早秋の来より



上高林の三番豊うらそよくとすも志のまよくありやすく一のせ

三 残暑

のころあつさ 夏をくふ 暑をひきぬぬ ありさ残のこは  
秋浅き 夕風をまけ すとぬる解

子箱の徳をいれと秋のまぬらひすくよくもにまぬ暑は 徳を

四 七夕

あつらきり ひそく せり暇 あり合のなく ぼく合のなく  
紅糸おれちり かつたのそく けい合のなく すがこくく  
天の川あひ とうらふひ ねらひの糸 雲は糸 ぐさ糸  
あつふ奴 ぐらおの水 うくこをそ

南隣の浪海をうらり七夕はあやましくとにらん一は版盛

東西よつふ相撲の二ッ星あひ晴天もあつこ一みちね起  
七夕のあふてよふなけあは子とつらねはさく合のそ光  
その川つらのひまわりかまらうとほくそあらん猿田をたなく長人  
七夕よあふのあきとあきちれと後の糸の帆はちうちも 金結  
七夕のそくおれは二つとちうちれう一二十八日 二億を  
かすたのつてせふちんをさけとちうちまの車留せよ 定丸

五 草花

ささのそ 庭のそたつろ けいの下萩 けせのちぬをき そよく  
秋をくき けいをき ちかちか ちあつちの萩 麻やうち  
ちやまけ ちあつちの萩 ちあつちの萩 ちあつちの萩  
ちやうちけ ちあつちの萩 ちあつちの萩 ちあつちの萩



戸すの巻 くるり 初尾をか 尾をか袖 不にりか  
まねく尾花 入野 まの入に かつら ののろや 尾の若を  
あちをらぬ 不ろりのひらり ぬき案 くらんり しくあ  
一掃よ白ふ

六 萩

ありそ不次家よほりく 秋風のすしりやせのせのたまよき 捨安

七 萩

吹まらすそのく風は仙人もあつる 牛のししきれ乃そ 仲塗

八 女郎花

とまふくしたる月のべ下馬とせよかの遍昭は 早もの場を 雄廉

九 落

秋風の吹よつけらもいとすまふあつてあつてよりそらあれ

十 蘭

風の子に不ろりりてふふちをうあひひくよつきてあふふ 矢植

十一 雁

まのうり たのむれりり 天はうり 雲井のかり いくらう くらうて

つりの玉つさ 秋路の標 月よあく 雲れまて

光伝の矢振あつてもまのまのまのつらまことんゆあありあき乃そ 光  
南系れまち月よらふ一合の雲井をふられけりりそのあり 市人

十二 鹿

ささうら つまらふ くるりあく 鹿の人の麻 ふゆとれーり

ねあふあつりけ さあらぬ 其り標 水くまの岡 さう野



秋の序よかく小男麻の角おれいさのよからくてもめや急ぬらん 仲塗  
二二三丁まはしつや麻のぬいた人のさたのさちみあかく 雄吉

十三 序合

のワたの風 花序あわぐ 草木をれおれ ちさきひき  
序あけけき ねすさまし 秋のむらぬ

あうらうき急きて頬をふらうか序あけあさねうくもあしよんれ  
鬼さりの安をうらうも吹あれて序あは目れえあわわらう歌 三徳

十四 五政

秋つち ター ーワけ衣 ーのーうか むすふ ひうり  
あふにぎく 不せき ーうらう

ぬれぬまたそいひうらうとまうてまのほろく 能くされあ岡持

十五 雨霧

あきまると ター 秋ー ーま ーけまき ーらのやふ  
さうく ーしり へんり けされとらう じんじんすい

えあうはりりき冬を秋きうあああけもくくらのわりりり 鬼貫

十六 撞

ああのひりけ ちその袖え たく一日 日とよふ ちうふあうえ  
あわがく 花のまうく ああのすうえ ちうあま

しらあふかひくらの若れはまはあかあも目成いひことすれ 雨什

十七 秋夕

秋の夕えれ ちうらうくあは ちうらうの夕ま あまねあうれ  
こすえさひうさ 袖ぬら夕







花をくれ 休養此里 まのいひ

このれくろしきにちりれてあつらひくいとあつらさく光

十一 略

志きのちひくた 一ひひは 一れを望 藤のまむ めくろれ

あは 一府 あさくれは 一うせのほ

蛤よりちりと志ひくたをうほめて鳴まらぬ秋の夕言 版盛

十二 秋田

小山田 門田 一せ田 一とて 一をあま 一ふをばあ 一かろをば

いふをばあ 山田のふ

もろ舟のうらうら秋の溪田らまをうらうらまは乃橋 常願

十三 檜衣

かしころも 衣の音 妹の音 飛をの衣 植の音

ちきよはくろ 里れきぬ 小夜衣 月よるん

秘つうくふろくやうを塚に拍子もぬけのわくろもろふ 蟹音子

家ものをばてめくた麻しきかくこあうれ音らうた里 蜘蛛

十四 虫

まひなし 一きり 一まごうり 一ねね 一れまき

まろくは 一すく 一まききか 一ひよ音する 一うもすめ

むらうれを 一木の序 一のちさ 一さう序 一むき世 一き里小序

大系や虫もさねのふはく馬道もあつた織もあつた 古傳

夜あくはちくくしつに音の序入虫のねくとすまことゆけ 郊云

西棟はあつた相生の山中らまごうらむのこをれまき 金鷲



廿五 菊

あつまきー きーのまらた 山ちのー 老せぬー ーのまらた  
ーの子をりて そのー ちよれ白ー うむらー 岩ぬのー くらつた  
八重さく花 あゆめくせ 星の光はまらふ とう袖白ふ 菊川の里  
うす河川 吹上のを皮 まうたの島  
百草の子秋糸とあまをもめてくはゆり菊はさう山ま 美敷  
おととけくころまよるてとれくは皆名うつさの菊のを筆正 三和  
白菊はあふふまきくも慈母の北斗をささふくみくころる 古在  
あうあうもいそとてとく痛くうらまきこの入ぬ糸丸菊うか 井隣  
ときまふせるあふうも尚世の心をよのまんそのまきく 兼人  
作り菊も入し強とわが糸の花をのべんくもに社われ 定丸

廿六 九月九日

くふろり不戸よあふんのをさくは満ちるあ斗のめやうく人や 妙雲

廿七 葛

くすのを まくはた くすりら くまのうら風 むはの枯くせ  
まつく ううかれ まあくす いあま群 とまの杜  
何ぞうらうら恨く葛のをれ風よあのをとありせさうらん 丸家

廿八 紅葉

左門のさち うはー トー 中不のー ち不のー 冬はー 冬は  
山姥の手染 うら秋 うはくく ちんか わー 海 ふあれあき  
立田姥 昔のさち とむらふ くら田山 あら山 山向山  
めらちあふいふし不而し不あわくそとから孫とあ人のころん 漢江



独居ておひりさの御紫より思ももまん林うん乃沼橋阿

元九 暮る秋

ゆく秋 秋の暮 木末れ秋 老月の末 とほくぬ秋 久ふ秋  
秋の名ろり くらくいとさき 秋もいぬやう 乃ふのりれ  
秋ふくく條ておひりとありとさきとさくく袖をしちりゆりた には住

三十 九月盡

老月の暮も老女の封しめとゆれハひふくをれ月あそ 猿人  
あすさるまへる秋よとあふさかを門不積よあれたらくれき 唯住  
とつめとも御まのまれば白雲を志もにむすひてふくふ秋 光

圖書愚抄卷四冬之部

一 初冬

冬のおしめ 冬あきたりり 冬をきてら 冬をまへまふか  
秋すき月 来りりー 冬を淋しき 秋そむる 初しれ  
くぬもろく 初おとれそむる きのふとそ秋をくれー  
冬ころり ひろく煙火

か貝之の神り出雲之とまともものもころりも冬とことそふれ 飯盛  
おやれ声あひりれて小風のお人内さむれ冬乃つらくち 権安  
秋の日もつわ十月とけー坊をいつのるまやう秋もくらけり 金持  
池水一歩のま辰をーこようかーむ鴨居れ冬乃入くち 光











うらうらき其の場をけく物すらや霧ららえそに音あふ竹 金成  
雪の目いとちとあつとあつと物あうら巨燈よりす竹枝をさすき 山陰  
雪入まの代よのりてうかれや家にあさふりのきあふ 砂 小ま  
障子を銭毛のまてくあうあうに手むこれもつらうも 机 飯盛

八 寒の声

うれあー 志すれー みるれー 志もくれ ー 此れ家 波のつらー  
浪をたー みののー 雑波に ー 波に  
あわけつゝもつたあーのまをきやあーをかれちになり 酒壺

九 冬月

氷の月影 霜夜の月 月此氷 冬夜の月 雪の月 雪夜の月  
雪夜の月 月此桂のくれぬ

かきそりけをうる月のす家とさやまを山根乃よれーきうあーく 揚洲

十 千鳥

さよちとら びー さまー ー さまー さまー さまー さまー さまー  
孫さめれー さりー さまー さまー さまー さまー さまー さまー  
波に 波に 波に 波に 波に 波に 波に 波に

おてる波のうけ太刀のゆれさううてまふちとらあ南 揚洲

十一 氷

うすらり ー あらり ー さまー ー さまー ー さまー ー さまー  
けされー ー のとちめ 氷にー 氷のー 氷にまたー 氷  
ひもかみ ー ー さまー ー さまー ー さまー ー さまー

山姥もさる氷をうさうと氷津せぬひやとんる布川 智恵



み神のちちもわらわらうらうらとさるるにゆりくむむれを 金鶴  
ちかされぬおのけしも梓弓あてれつよさまはうはれまなり 鳴子

十二 水鳥

かもをー 母河鳥 をーれ毛衣 波の橋 むれあり さりく  
さりのおすま うちねのとき ちひ羽 入江 浪のうき浪  
ねこけー 羽うのまね

はうきねの銀をさういをうりたらふみす後の川乃と此塔也 岡持

十三 細代

あしら木 あしらりり せいのあしら あしられうき あしらの座  
空流川 さふり川 ひとのあふか ひとのあふか

はま虫は似らうやう法の細代をばしりくひとさういさふ 丸家

十四 神樂

神柱 ままふ袖 おあしりて あきうらみ声 柳葉 うかつく袖  
まさねのうらう 夜れやと竹 おね夜れを火 とま衣 杜の志あひ  
まわりこ 甚日 八幡 加茂  
いあしも其うらう紙の引もよとあう面白とのそくあうらう 素解  
小夜までうらふとまきけいもは只もかへいふあをまのあうらう 金鶴

十五 俳名

とあつる三世の俳 ほうけのまをさつら 身ははりのつら  
まるともにつらもきあり 法の師をむら  
ちとあうとまあうとまよは法仏のまかひらうてりあをいつくまん 自主

十六 雁書符



ちりたり あつふのうら まらぬさう ちあれのたう あらたう  
たう引すて たう人 粘るる ころり所 うまひを  
うり衣 たらのり清 ちよもまうふ

草花系君をありこころかうはこころのちるるをちあらう 滑明

十七 炭竈

すまがま 小所のー 松のー ーはらうり ころりー 炭をくち

小所の里人 大系山

山のうこれ多うのちるる山原ちれも草花の根きり系まうりてちる 本細  
れ久よあわぬ山道のちるれを炭中くちありあまの白あへ 金終

十八 倉

こあすま あつー あさー ちあれー ちのちけよあまうりー

ねやさむく さしり夜

ちあすをぬれともひるのこひーまうりやうりちれちあまうり 常順

十九 埋火

ころり火のりち 室のうらり火 ちあれ埋火 ちうふらり火

ころり火れあうりま ちあをれ まらる 祿是れ友

埋火の火きーとちまは房一字とちれまうりすまをつたうり 折更

二十 歳暮

これゆりー ちああー ちーちれぬ ちーちあむ つのりー

こまひのりー ちのりう ころりーとちく ちのさう

ちのちらとちらう ちーちれちり ちもこまひかまう

あすのまをま ちあちちつく ちの隣 ちれとちま



子のりえ 年ハワナリ こと此実者 ちしちと命らぬ

このまね松山 ことこもれぬ 其まきちうた

ひしし尾路うけく控引の一夜不とにありまけふか 金増

と信のよんひさの志らまきちうた ちしちと命らぬ 園持

を解の仕旦の白の一样とともによれとちもつきはた 版登

一年のむらり大根ふ掛ちをわくことえにきもれあささち 金結

六一 除夜

福のよ子鬼はとうても所分れまあう外此事ハ福ハ 查細

鬼ハ内福ハ外ト出れともとちしちと命らぬ 雄老

一 意

意すてふ 一かハ 一ころも 一ツひぬ ちひん人少

あふのころふ ひとてあふ つかもも うちけぬるは

うや入 うつむもつまねぬ うちよ出にたり つかかさ

ねもうけの おひひぬの ねひひあまふ ちまうて ちんうか

よふまハ ちとつてしとも あんううく いまうか

其申せと人よはうくはるうさよ家袖の大北あさすけも 光

ものまぬむりに今引くくすくすて君よらうひ返り 市人

うき人をあへん申せりあうねにまもあけのありとちあう 世次



たぐいと意の深き志のむし君の同のれい下に引きく 仲住

二 初巻

あひそむれ あひそむる 入初巻 ことそむれ ことれ初巻  
おれぬまは 初巻 意れまはむ 意の初巻  
只ひともうしつ知康の山とらうしそむるまはむしつ一巻 意の初巻  
こらうも人のこる同とぬまはむしつまはむしつ一巻 意の初巻 巻一

三 忍巻

志のあれり 志のひね 志のあふぬ 人れぬ初 一のあふぬ  
しあふのこれ 志けた人目 一巻 意の初 一のあふぬ  
袖の籠つを 人月つみ 袖のまうし  
戦今あふまのあふまはむしつ一巻 意の初 一のあふぬ 版盛

盗人よえとらるるわく袖うや思ひてまらふ巻のまはむしつ 橋瀬

四 不巻

あひぬま あふまうり命 かまぬ中 あふせもしうぬ  
あふまのこむむ 下ひもれとけぬつしき あふまうきり  
まかのま 君のたうとらう氣のつまうれまのありてまをしき 住虎  
あふまのこむむ 八卦をぬまはむしつ一巻 意の初 一のあふぬ 光

五 待巻

待よひるる ことぬ人をうらみ まらふつた ことぬまうらみ  
まらふらひ 山月ち山 山月ち山 山月ち山  
待よひのまらひ月の影うらみまらふつたのまらふつた 阿波浦  
其の夜れまらひ氣をぬまはむしつ一巻 意の初 一のあふぬ 一調



六 逢魚

うらなまきうら あふふらけき 松のちりさきふ うらなひも  
うらなまきうら あふふらけき 松のちりさきふ うらなひも  
今そふあそとよの玉子方へつもに逢う今れつあはたりとは 橋側  
抱つけの扱やりうか君り肌今まそふ今れつあはたりとは 橋側  
後漢

七 初逢魚

とけそむら あひそめて 又とあひえん けしうそむらうら  
うらなまきうら まをえしちまうら

八 後期魚

あふふらけき 初逢魚  
うらなまきうら まをえしちまうら  
袖のうらうら けしうそむらうら

ころよはあま のころ月うけ 袖のねあ 夕まのあか  
つれうははひうらうらうらあけりさうらうらとねりひらあうら 未は

九 逢不逢魚

のちらうらうらまきうら 一夜をうらけちまうら けしうそむらうら  
あれて後つれまきうら つれうらうらうら 夕まのあか けしうそむらうら  
糸うらうらあけつれまきうら 一夜をうらけちまうら けしうそむらうら

十 採魚

うらなまきうら まをえしちまうら うまねの袖 夕まの月ときそり月  
あふふらけきうら 一夜をうらけちまうら 夕まのあか けしうそむらうら  
暁をつれまきうら けしうそむらうら

接子でも魚のやうとれうらまきうらあけりさうらうらとねりひらあうら 未は



十一 眼

ありそあるあひ うまー ぶー おやあふ ちひれあひ  
あふぬー つらきー ーく信 ー川 ちひれあふ  
いそぬあひ ぶ子節のー ーみさう ーれさる ぶぬ人とあふ  
ふぬれきさうりえあふーあふひ何百貫と目よハヌくぬと 言夫  
あひ川あひえあんとまうりにあひあうれあひあふーさや 金鷄

十二 片思

うさあひさる ぶぬ人とあふ ぶぬのーあひふ ぶぬひとにあひふ  
つらきーのふ ーぶぬのーれ あふれぬも人らなれぬ  
うさあふとあふあふーちまーもさうぬ人とあふあふさうさーあ人  
一たふよさうらあふれぬくあひあふあふさうと人らーさや 月事

十三 恨

うさあひさ つかうらうらー うさあふぬん うさあふにエる うさあひ  
まさあふさうー うさあひさ ーあふさうー ーけぬさうー  
恨あふあふとあひてさうさうーの葛れさう信のうさあふさう 岡持

十四 聞意

まさあふぬ中 ぶく風のさうり ぶぬのさひまけー ぬのさうーさきー  
信くさあふのさ ぶさうらうさあひさう ぶさうにけ雲井れさうり  
信まのさあふてさうさうの耳さうぶのうすれちさうとさぬてーさうれぬ 成木

十五 見え

又さあふ ーうー信 ぶぬのさあふさふ ぶさうにのさあふ ぶれさう  
ぶの信 あまれさうさ 月れさうさうにさう ーさうさうさ



九十九夜通ひ一人の足つらや足あてられぬをぬれぬ酒粕  
人目よもつてくく足々敷き世に多く不の外れ宛やおくく人雨付

十六 尋志

たらのめ くらひつ とももあそふね ともくへへの傍り  
たらのめ くらひつ とももあそふね ともくへへの傍り  
くらせぬ人の舌まきり雀うやを箱のどくや入止とも 珍光

十七 祈意

つとあきといのう ゆうじんき かけていのか いのうあき  
非よあひい あもとどうくか あひけといのう 非やしか  
あつ中 志あふへいすの非 まね 三端 初康  
いづつらの加藤よいのじくひあらんやとつてもたす上佛人 佐藤

いのうなるゆれはびきたきまぬまのふて資舟よよと合せぬる  
吹々ふん風の非くけて行くいきう人馬乃耳くも唯佳

十八 別意

つとあきといのう ゆうじんき かけていのか いのうあき  
あつ中 志あふへいすの非 まね 三端 初康  
あつ中 志あふへいすの非 まね 三端 初康

あつ中 志あふへいすの非 まね 三端 初康  
あつ中 志あふへいすの非 まね 三端 初康  
あつ中 志あふへいすの非 まね 三端 初康

十九 各意

あつ中 志あふへいすの非 まね 三端 初康  
あつ中 志あふへいすの非 まね 三端 初康  
あつ中 志あふへいすの非 まね 三端 初康



名よる名 うき名 おき名よる 世よりのうき名 何れれ名  
あし原のうり づら名 うき名 うら夜 うら名

えおてし海よりうらへぬけられとうき名身へえよなるか 傾盛  
あうけしえちのにはやあやほすらととて今れうき名ハ 金塔

二十 乳魚

ゆれしうき名 おもてにあうらう、 世よりの酒 人目とみけく  
人ゆえあうらう ともづら名 名よるうらううき名

又出さうく旅の尾よりうらうき名取をたすともゆれしハツ足 取積  
名よるうらうしはれ袖ハ合打とうらううき名とらうらうすれ 定規

廿一 塔意

名よる名 意よるうき名みのかう、 意を深まけ 袖ぬれまうら  
ゆれよる名 意よるうき名みのかう、 意を深まけ 袖ぬれまうら

廿二 変意

ゆらうらう このめをけうらう、 うらう中 もとのうらうたうら  
たのむれうらふ ツムしにうられ

それ意ハ志望の羽はわれ後よひうらうてもわらうをそめた 佐谷田  
かうらうれうらうらうらねハ外よ東引人ヤらあうら ぼん

廿三 久意

おひつしうらふ 意よへてつうき おうらうて まうきつうき  
うらうらうひるまき いくも月とるは 意よとあう

三平さてけりぬ意のう、ぬけらうられた社のひふこらたまき 梨巻後



廿四 近意

ほとまき中 ちとふのれを ちとあり ちとれいねを  
あつきたまらうの中 人のひとを

ねふたまあひまよふと出されぬの君う近所の切したぬう定九

廿五 隔意

あふ人のなをふるをあるとも 夜とこり くとら 日とて  
人よふるをらう

あふ意一 意よんもまの解れまぬ夜まての中よをまて 中栗

廿六 忘意

人よつてうて身 ことれ水 ちとれらる 人よらぬ  
ちまらるまき けうけ岸よあふてま 秋代麻 人の秋

人のつらさ めとれつらさ

かひそも人がまんちうぢうつしれあへまのすれとらうしき 右文

廿七 後意

かひ後らるる 長修斗さぬ ちとあり ちとふり  
あいのとちひあふ ちとらる中 ちとふらる身

中修しは身ハ何とみかこ纏ひくもくももあれた身うさ 兼人

廿八 老意

老の身は いくほふの世う 川らのちれつりの智い ちとれ  
うらめしうひあき老 老その衆

あふちひうひ 同うのれ遠よてのあをぬうしふと老とふら 尺唐

廿九 幼意



ひまどろふ まじむすのれぬ草 草花をのくまきり くらりあそ  
ひや小ね ちりりこ ちりりこ

まじりあそをけしもちりりぬあそひは物一人の思ふ人をつり 村竹

あそりと同しちりりあそひありおしりててしりり

ちりりあそひあそひ二人も傾くあそひあそひあそひを遠くあそひを橋間

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひ 雲井 ちりりあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

三十三 寄地色

あそひあそひの玉 土さくちりりあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ



より今い風の井子やいのらまー同じ松子君と鹿ぬきく 楮例

三十三 寄山魚

いれ山 あふ坂ー 志のふー ずんちー ちちうー

うさうつーとねちうとひぬうあつりうとつじ山とあつて じん

三十八 寄園魚

笑依のち ちれそくぬ 人の笑 いまそのー あふ坂の笑

あふ坂と狼とともねとらとや吾通信の寄とりう後 遊依

三十九 寄火魚

ひのれ火 名のー こうくく めのちひ ましぬちひ

石あくとつりてもんせんあふ火の出うたした君ととそそく 引方

四十 寄水魚

ひあ あのかくれ 山の井の水 くりひのあ つすれ井の水

まんまは水はねとほの中うくむ返るれあまぬう人 鬼丸

四十一 寄木魚

あふ坂人の破さのねふれやすれと婆れ信と目にはく 疎人

四十二 寄竹魚

すんぞくの竹とちうりて人よんせうたつたのひちる 木陰

四十三 寄竹魚

はまふさま今うさむいとうとふすぬ地の引もれ山子鳴 河子 与布孫

四十四 寄獣魚

つれもあ人のむれわく 無うせんうとけまけつたあひちる 橋例

四十五 寄魚魚



塩うらにありすてきんのかくれと松魚のわくまうてきん

四六 寄正良

書ねらぬい十和らまき早うまきりさう、車れあひさ味人

四七 寄系良

らそえしそけし君らわのいれとけぬちひひさうつく 何結

四八 寄双良

君史し双の海ふしつじも巻の命毛あつりかえあん 書盛

四九 寄船良

夏の海作き中よも舟玉と同のうらぬよよいのう海 舌風

五十 寄弓良

よをう縁どひけど人月れしげとういさふはまらもひさしき 見終

園雲思抄卷六雜之部

一、曉

あつみきれぬ くられも何縁 ありぬの月 ねさたの夜涼き

あのみ 夜とのとれ ぢゆれ名ざり さしつれあつみ

山うらう 横雲 ねえの袖 雲ふゆり

世の人をたぢりぬの曉し小雀人をしてぬのをもあけし 金鶴  
うら原の園のうらてし出ぬ直てまやあつみきを生りて 咽人

二、松

まつりせ 一のあうし くれ下つも 一れ葉う 一のみとり

子とせのし ちううせぬ くれむれ 言砂 くら山 生れ松らう



こふ人のみよりとよふ赤松たまたまあうんいつらそんこふ松 万葉  
うひちりよありてふ松のむひちりの枝は二階も三つぬもあこま 中栗

三 竹

ふれ竹 竹こしー 竹こしー ぬいー ぬいーのー うちさかー  
松まげー ままけり ぶーと 秋の原の里 ぶつとれ里  
なまあーむつーけあふ布は糸竹との根うらまはいつくまふく久 左佐

四 海

うらうらー あらー ちかー ちかー ちかー ちかー  
いさぎ けあき 夕あけ 埴風 ちかめふ 沖津くを  
あにえれー いせのー づのー ぶさばー ちかー  
まじー まつろのー かごのー

これよりあまのきほのなげぬのねらまそちまうちあめふ 新安

五 山

つ引の山 八重ー 山のー ちかー ねくー ちかー  
あー ー ぶと けりき山 ーふとら ー後  
了又ー くらあー ーのちかた ー里 ー人  
一合うら合うきり此富士をよそむと三つくの山とあらん 近石

六 茶

こけむね ーむら ーれとら ーうむ ーのちか  
あまー ちねあきー ちねうま  
誰うかくかあぬませえんをーもらうにちねのさけれあハ 常恒

七 雲



まおつふ ひふー あうー よふれー りーあひ  
落の毛衣 なつる ふとせれな ひまわら 天とふ  
万ねんの龜れよりひよろふまはまき九子業つろのうろ落搔安

八 野

野へーりせー ー沃 ー中 其のー ぬれー 秋のー  
冬れー 紫ー 飛火ー さがー 入ー  
梓弓入野の草のむひーきりちろりをとれとむろぬまは 万九

九 濤

濤の系 ーれあうま ーれあ ーつせ ーつ浪 着るま  
書羽の滝 せとちりれー あふれー  
ひまんうろえさしてもとにくにまわて着る濤れー系有風

十 栲

かけそー ぶそー ひとのそー 里の板ー たふー  
字はー むれ岩ー あうれー こまか うけ  
津の園れあうろの栲のうらまはまがよむ人のまーかぬり ー人

十一 関

せまぢ ーれ戸 ー屋 ーさ ーのまらう ー落のそ  
戸うぬ代 人目の笑 かよひ後の笑  
迹あうかけ糸衣の笑さうとて袖もあうろとをばー 査烟

十二 別

たちうふ 袖のつれ つかるあま かつろん ひふれ引落  
おひひやろ かけ糸衣の笑さうとて袖もあうろとをばー 査烟  
梓弓人



け人を今すなるとおろかすもつれくひてはほつ一里はう 千万里  
庚子及子里の馬もあれうか別くく人のちかむけせん 上げけ

十三 様

いぬごらも いね いね 一此者 一此者 一此者 一此者  
ねごらも やりぢり 者るる うまぬの者 まらふ  
様たけれ竹のむく産とありていふちとまりてまふ  
江戸と出く一ニウ三イ四ウみむに鞠子此者よまにるる家  
川苗にあきく産ふくう狂言よまふ人あかく志所とまふ家 元ぬ

十四 田家

田のもれ店 山田の店 うり店 田中れ店 かと田りれ  
いふりぢり あせつふ すまられ田井

人よごらとめめる世情もあうりるまふこのまふたるけれ丸屋ハ歳良

十五 山家

山すま 山うけの店 ねの下店 志を此戸 松ふけふ店  
まののらうく とき世の外 此本の店 うけひの店  
おまの山 むくらの門 かよふ業人 岩のうけ店  
糸河とに着る清水をむすひていふ命をつかく山のしとる店 李細  
は世といらうくすていふれ珠粒此らる人もあき山をゆひの形 漢九

十六 老人

ねらうく ねいの浪 おきあはひ ねのそよあむむしを  
うられ雪 ねいの浪 えあひの雪 老の坂



鏡の祓つとくはと老とく今はいわちもくうかりと有風  
くんごせのともぬい枝よつく竹やそちちちやうめる  
全

十七 遊女

うかれめ うかれま 一夜つま めされめ たはたみさちきり  
傾城の月雪花のころふんてうらあつ門まはぢく女はく  
若らまのまぬまおちあふぬよれたのうき味なふのりき彩造 赤良  
梅下ればさちち人のせやせよてまてうらふりこれびつひ 岡持

十八 王昭君

あましく歌とある なるすうひく程今 みこれるゆさひむ ころのこ  
ましくかみの糸 うんしゑのうらま  
瘡あくとうたさうたら次女住いう門ぢ人のまつよとあなる せり華

十九 揚貴妃

あまのまよはれありう まなろくまらるゝ 家のまふく 祥雲  
とく先をくおれまうと ときをさく人  
かりうとこゑに比野葵の羽いぬけく飛ちみる鳥とこそうき 高菟

廿 夢

ちちみれ也先 一のうきはし くちねのく ちちるく 一後  
まじりき ちすふ こんまをぬ まとらむ  
あまのまよはれのやうはねふよとそ初先もあきまをとしとれ 木立細

廿一 毎常

あまの世 うるとれ世 ちをくき燦 ころ魚群れ燦 あまき玉  
まえみし人 つらよひる りまうれ門出 群人の重殿 草れ系



未のあひとれ事 舟忌

子金のおひとあせし人なまつらち五つまんよらる世に舟 友佐  
あまそよあまの祈や孫北皿つあよの祈へのやたあめとこせ 紫雲笛

廿三 寺

山てら 祈い みるい 入おのう縁 ぬらた夢 ほのちり

まきつむ のりたはみ つこ むくわ 雲をちた袖

とりの火も消そよあちち祈よま入らあつらつさか 入安  
山ちたあまの夕くれまをそれい入用のゆは権をそはきあれ じん

廿三 神祇

舟のこま 天店 みるた 玉き 志あか 白ふ まね

ねきとそら ちあうこ やとたえ つかして 楸 まはら

むめひき 何とゆれま

廣あよふらうけんゆねあそそねとまうた男やまの那 まね  
神玉のちうこれ程とまやけいらふとわ祈良まらま下らとら 金點

廿四 懷舊

うくことたりふ ぶうかご むくまのふ ちたし月日とねりふ

まをらうかむらう ちたあうそと ちうれての世 男のむらう

老のむらう ちうぬむらう ちまにーれふ

老う男のはあうとあてくあしきの場といそれー昔なうけつ 金點  
男とまらうまらうの昔まらう今のかまをち相さびるもの 白王  
かゆちあゆらうちゆちあはよけし其ううにちあゆらうもつね 入安

廿五 述懷



身の不と成おのふ いけふうひがれ身 浮世といふ ねをそ羊ふる身  
むよと何るか 身ひと何をあげく

世の中へおとせうとや酒れくちあうの積まうりぬひあり 赤良  
世よもつらうとつうけつと橋尻風するとあうよハ折うめとも 橋剛  
うおれいふ身の痛れ妙業を千金方こうきりうとく 金結

廿六 祝

八平代 上修門代 子とせ びらうぬら 井の治る国  
五日の風 十日れあ ねま死さく 清代ハ上修門世  
お目出さくくとそ思う代をめでうらうをめであうとけいさ けい人  
入用の竹ハハそとをうけして虎のすまうふをめでうら 米人  
あふけ程をささえしんねますむとせの書けれ芦系の国 金結

附録

一 狂歌来由

たを止致の濫觴をうくくふ夷曲とよふハ舎人親王の  
日本書記にうくくは夷振と聞えくハ聖徳太子ハ傳曆よ  
うと一美葉集にハ家持意吉麻呂けうくハちのりうめて  
させあふとつとつふありぬ中は代うてハ後香羽院の御時  
水無依の和音所ハ栗本と召されく光親宗行泰覚法  
眼等の諸宗匠をさうめられ毎心新と名つけ狂せさせあひ  
と六条内府仰られハ井蛙抄にうくく又ハ比叟月坊と  
ハ系法師を二やうく此るハ名高ハそハ後ハ雄長老守武  
長丸未入安あというくハにぬんあて近くハ八宮と



算くさせまひしは方きもあう好ませぬらうは行風々如き  
そのせきくちありあし此を極まで狂ふことよる若し油煙  
うもれんとせぬのれにこそ狂波津の手ありとありと  
外よりあうくあしやうつらき大江戸ありのそをやあふ  
天明のはらち四方赤良唐衣播磨元空阿弥朱樂漢江に  
まじり人のあれ口とくよみ出しよと今ハいふくやうするあ  
りのらすれよよりの門をれ人すてり大江戸のありとあんまふ  
あつら此よりれいさほしあそあうたふをのれりそいよりしそ  
口をくまはりののみしあわれとあおくまのめかすしつらさ  
まのらうよあしねはあん過りまのちれとむ人あやうらそ  
このれ極しと狂分師の名よよひなんら却くこのれが

本懐よりつらさあれはあしはらうたのれり狂  
肺子とつらさわら乃りそえり狂しあ門出せぬ  
あつら日火燈のやほりつひはくふになん有るる

二 狂の一字

狂歌よあんとおひふりのらすん狂の一字とあふ  
論語曰古之狂也肆今之狂也蕩鄭康成以狂爲倨慢以對  
不敬故爲慢也す清狂之狂也樂天詩問我狂歌詞や  
ありはら古語よ狂者進取一槩之義不顧時俗云つら  
狂分師の眼をばくへき語あり和あしちつらあしよみ出さ  
んつら案ありよ進くつらあし狂分師の才一義と  
行風々夷曲の曲れ字よまがらとつら訓ありとあやう



狂歌と書きあぐく又狂と狂と字形の似ゆふをちやちやして  
狂言とばしきぢがひうことおせらるるをむねんありと論せし  
何れは説ありむ川きやうり風いめのまむひあるまるとれ  
あれよのこゆは狂の一字曲の一字さうにちるぬとんさう狂の  
まよふ系通りけそまゆしを狂人乱心りのつるよはありさる  
あり曲らういめの名あして賦吟行歌詩とわさしん  
むれいこそ夷歌とも夷曲ともよひちちあり曲をすくむれ  
新あれいともまがううことううううううはこいこいぢらうう  
おほゆるゆありぢくつるあれよのこゆり生涯のうううこ  
れ一首とて三嘆すきめのいこい實は下り様すまといふそ  
り風うこそありし狂言百人一首と書込途なき

二三

よみうごむ坊并に歌とらね事

先達曰す川歌をほくは佛は讃嘆をうらうらとせし  
すこ為家の作は歌をほくはむと川橋をうらねれ  
こちうくは流ぬやうにうけしと狂言とゆふおあし  
魚しとまこくおいむうらうらうら言葉をほくすうとよ  
しとほとくと初念のうらなす川言葉とら入こくうら  
ほよすふとまうらうら言葉とうたよすふといふと其歌  
の縁借とうたぬめしうはまありんやとえい寄祝とあり  
すよの黒書とまはらうすまよふ海ふく墨批とらふ  
縁ありめのとつらくおひひとせうくつらありしと執白と







優成々判々雨ふれとくちと息と袖をぬれ々ふり鹿  
の多しよるそまらえ侍白ハ雨をせんあくしそ麻のふや  
くそまのへ侍りとそくさし傍歌あり

六 落頼の事

すれハ山月とつふ影よて月をよみまれと山をよほご  
う落歌あり侍と山花盛とつら歌よ山花まそハよみ  
まの盛の事と落しそまら今ハ此事をよみまら一歌を  
まらしてよまらわらひハおのりせまら侍らぬとそれハ初  
のゆまらふななりとこし一まら初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ  
字とら一ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

七 落頼の事

哉 かのふりぬ

中の事

あまかたがしあか

其うとえがしうらふに今ハそくまらと初ハ初ハ初ハ

すれうら初かり

かす初かりそにまら初かりそ。又つらまそとあふまら

かくこの初かりそ初かり初かり

様嘆ま山ま初かり尾の初かり。初かり初かり初かり

かす心の初かりぬと初かり初かり初かり初かり

らん

らんよらうと初かり文字と初かりと初かり初かり

いつ

いつと初かり初かり初かり初かり初かり初かり

らんと下にと初かり

雲とのとあつた初かりと初かり初かり初かり初かり



山々守其の巖を掘りき。つら且其のさうおぬらん

て。いりあり。河の外よ心の跡をそ。よん心のうふて

。つひあうて解情をあくむて

ようきんちちりまてらん。山様をの整となすはは

。是心の跡ふてあり

日ろれへあふ人。山。西まちる巖の麓れとららば

。是よん心のうふて

併れいさうたのうらる。都の山を月ぬくして

。それいあうして解情をあくむてあり

。つらつらと心のつらとほとあるかあうあり

田子れ浦。あましく。それい白ぬあう。はきんねよちの博う。

あうつらつらと心のつらとほとあるかあうあり

。あうあひのや。のあうらとらんとそ。すーやうーとらつら

。月や花。花や白ぬあう

其の雨秋の潤を。世よあうら花や。お茶れつひあうら

。ねうひのや。まをま茶の整

。休むひすうらや。やとねふてつひあうら

。よひつらなや。みりつらや。とらんせや。かほてらや

。あうらあ整

。やすらつらや。その河のやまちにとねらうりや。くかああ

。すのしあり。つらや夕日。あうらあう止。あうらや烟の整

。うらうひのや。花やらうら。人やらうらんの整



。あつちや やとひますくをのうふやあり

。あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

。あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

。あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

。あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

人あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

。あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

。あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

。あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや

あつちやと若の山いふうせいのふつたのをよこすや











九 皮肉骨三鮮

皮

古人狂歌

蛤の玉れやうあるおすこととらふ用をさう乳は毒こそを  
田楽のころれて君れ無しきいする山栴のこそめうらや

肉

きくやうに木のこえつこふ様たはもけがよい養るあひまよ  
振すれとさう合するやあれいひまきふもきしれさうらと

骨

君らとそ有るなれいこそと無しぬの命を敵に捨ひるが  
九十九夜通ひ一人の更つとやんかしく敵いをぬらよ

十

六義

古今の序よりけり  
風賦出無雅頌と云

牙一風ハ

ものよよそそその後をきこしむりて  
そふとふ

牙二賊ハ

何をばくはしてはるかかそあ後おれはうそ  
うとふ

牙三比ハ

おとふとふむあのみとくそよすことし  
かすうへとふ

牙四真ハ

かれお是をあらうたてて真成よむた  
ふとふ

牙五雅ハ

たごころつふ儀あり正しくとらぬれあ  
まふありたごふとふ

牙六頌ハ

あやうらにわけはむあり不むらひとふ



このつれい祝言と云

以六義の事ハねがひありて説くもさる人ねと云ふこと  
くつひつて一車少くも意と云ふはよくそ此  
はくよ記に

十一 十幹

長高幹

今入程款

河をよけさハまもんもまのり出さつたの角もむをにあらく一漢江  
かく斗をたぐえゆの世中をうらまう一々のつく目も事赤良

見様祈

酒の味伊用の外も馬車ちりりとあつた市乃中へも 蓬菜

田子の浦も歩生くもねいそ後此室永山もあつたのうへ 仲登

幽玄祈

四すれもちまけりも夕とれと物あつたも死入もさるもくも也有  
るも不瓜とあつたにさるく死もふ屋のあつたね乃ちち 橘例

濃祈

ちりもあつたの糸にむすひも凡より芥にちりあつたハちり一白人  
徒一もまねもちりあつたもすすも村のあつたも通に月うけ 三和

有一篇祈

晴ハまねと西りれあつた目にも月はつた秋の夕もね 東信

綾も糸の雛一池走ら農業を棚一あつたもちりあつたのうへ 定丸

面白祈

松もよりり物あつたもちりあつたあつたも引きまぬくは松もまね



年の坂登る車北家よきわの心とてても終人戻らぬ丸

拉鬼神

分りみい下ゆをよけ且天地の動き出していさる抱ふ  
母の乳又のすねを奪い花拵んで言ふこふちうねは 光

若こそ此ふよりあふふよりこれら少く度之を秋の歌書さ 近石  
山里すすむいあふふよりきるもすれぬ福よさるくすんう在 金持

車可松神

汗あを流してあふぬ術のやくよまたあ津代をりそを 奎佃  
三交ふ版心をまゝくちくはあまきくはあうぬ世中 湖淵

藤神

思ひつぬまじやあふよみくし神の花と終の歌をそらつらう 金持  
屋より秋の夕まきり思ふたう吹きよ風のうらむをきりら 俊満

十二 神用符

扇ハ神

あふく ひくく たむ さげハ用也

雲ハ神

たかひく うるか きほふハ用あり

對とりつら事ハ

硯ハ神

すく 筆 けいせん 水入ハ對也

刀ハ神







十七 新六哥仙

後京極 攝政 大僧正慈護 皇太后宮大夫後成 權中  
納言定家 從二位家隆 西行法師

十八 梨壺五人

大中臣能宣 清原元輔 源順 紀時文 坂上望城

十九 上東門院五歌仙

和泉式部 紫式部 赤深庸門 馬内侍 伊勢太輔

二十 西三條三世

實隆 道通院 公條 祢名院 實技 三光院

廿一 日本三部書

舊事紀 廣戶皇子廿蘇我馬子奉 勅撰凡十卷

古事紀 安萬侶奉 勅撰凡三卷

日本紀 舍人親王太朝臣安磨奉 勅撰凡三十卷

廿二 本朝六國史

日本紀 三十卷 舍人親王安磨撰

續日本紀 四十卷 菅野真道藤原繼繩撰

日本後紀 四十卷 藤原緒嗣撰

續日本後紀 二十卷 太政大臣良房後春澄善繼撰

文德實錄 十卷 右大臣基經等上實 都良香撰

三代實錄 五十卷 左大臣時平撰 實大藏善行撰

廿三 二十一代和哥集

古今 後撰 拾遺 以上三代集之 後拾遺 金葉



詞苑

千載

新古今 已上八代集と云

新勅撰 續後撰

續古今

續拾遺

新後撰

玉葉

續千載

續後拾遺

新勅撰已下と十三代集と云

北四 万葉假名

るりこほはい

留利止保波以  
類里登帆葉伊  
累裏徒甫半夷  
流離土浦頗意  
僂梨途奔端異

とぬちへにろ

孝奴知色仁呂  
越怒遲篇尔路  
緒努馳遍荷爐  
小驚持部而漏  
恩主治反耳露

乙けやたわむむつれふわ

巨計也於井武南津禮与和  
古氣屋男居舞名都連夜王  
湖景弥尾位無難通例餘倭  
固解谷推圍牟奈豆亭代狢  
粉夏哉呼遺勢那圖鈴余話

いふましくのうらねろたか

衣布滿久能守良根曾太加  
技婦麻具之卯羅念楚他可  
縁風磨空濃有頼音疎田家  
得府末宮野右乱祢祖當閑  
柄普間句農雨螺稔宗多香



て	天亭手傳弟	市	安案阿哀愛
さ	左散作沙狹	き	紀鬼帰祈喜
ゆ	油遊由弓猶	わ	女免日目命明
み	美見身御味	し	志思私姿至
ゑ	衛會榮永穢	ひ	飛比火日肥
も	茂母寂藻毛	せ	勢施前是晴
す	湏壽守數寸		

元五 古狂歌書

古今夷曲集 後撰夷曲集 曉月酒百首 古狂歌集  
 雄長老百首 守武百首 正式自歌合 吾吟我集  
 堀川狂歌百首 銀葉夷歌集 入安百首 資之百首

上養狂歌集 負流狂歌集 負徳百首 拾遺家土産  
 宗増百首 由巳百首 難波土産

此外家々此集等以後くあれども大々世に傳へしを  
 さらさらの書ありし

元六 今狂歌集

若葉集 萬載狂歌集 徳和歌後萬載集  
 才藏集 故混馬鹿集 千里同風狂歌集  
 四方めく二百首 あふ心杯 東作道百詠  
 本立阿弥風百首 落栗州庵集 百鬼夜狂  
 東揚菴家集 菅江家集 白人集  
 多きや風呂 狂歌文庫 古今狂歌袋



大根太木狂歌集

狂月坊

銀世界

普現象

ひくろく

江戸下土産

五千多狂分合

狂分三十六分擦

狂分俳優風

もみぢのはし

狂分六より使

新古今狂分集

狂言曾我百首

拾遺狂分集

江戸名所狂分集

四方北妻一名其告双帝

〔廿七〕

五行五首題

水 火 土

金 水

〔廿八〕

五味五首題

耳 辛

苦 酢 鹹

〔廿九〕

六根六首題

眼 鼻 舌 身 意

〔三十〕

七夕七首題

待七夕

七夕雲

七夕五物

七夕摺

七夕衣

七夕船

七夕法朝

〔三十一〕

重陽九首題

菊映月

菊常夜

菊似霜

山法菊

河色菊

奇菊契

奇菊恨

奇菊核

奇菊祝

〔三十三〕

十界十首題

地獄

餓鬼

畜生

修羅

人道

天道

声聞

縁覚

菩薩

佛界

〔三十三〕

十如是十首題



如是相 如是性 如是體 如是力 如是作  
如是因 如是緣 如是果 如是報 如是本末究竟等

三十四 十三夜十三首題

九月十三夜 月前星 月前時雨 月前秋

月前塵 花洛月 古寺月

寄月度意 寄月別友 寄月述懷 寄月旅泊

寄月祝言

三十五 十五夜十五首題

十五夜月 見月 歌月 憐月 思月 惜月

暮天月 涼夜月 曉更月 月前秋 月分秋

月前落 寄月意 寄月友 寄月況

三十六 堀川院六郎百首題

春 二十類

立春 子日 霞 雪 暮菜

殘雪 梅 柳 早蕨 橘

瑞雁 春雨 春約 喚子香 苗代

董 杜若 菖花 數冬 三月尽

夏 十五類

更衣 郊花 葵 郭公 菖蒲

早苗 照射 五月雨 橘 螢

蚊蚋火 蓮 冰室 泉 荒和後

秋 二十類







夏十二歌

夏衣

避暑

水鷄

秋十八歌

晚立

秋夜

秋香

秋虫

冬十二歌

初雪

夏州

夏虫

秋風

曉月

秋香

秋虫

即佳處

持川

七夕後於

嵐

非

扇

夏獵

八月十五夜

稻毒

秋山

推柴

粟

汗以車

落葉

五節

菊

食

琴琴

夏調

併名

旧年立書

忘十歌

忍忘 隔一夜忘 經月忘 行年忘 漏寺忘

不見書忘 且見忘 麻受忘 待人忘 別忘

雜三十歌

雲 星 生陽 石 水海 原 滝

坂御 寺 社 榊 桂 小藤 萍

元服 賀 七夜 仙宮 唐人 王昭君 妓女

老人 泉郎 船 隣 笛 筆 蜘蛛

猿



与不乃師を走るもあつたは走らば師を走らば  
おせちのせん部七巻のまはりうけの火はもくは  
終るもぬ

寛政三の年

金鶏野客



木阿彌大人著

俳諧饒舌録

全二冊

てにをよそのひびきをよめ月花神歌  
水波俳式句教去後終句切字未迄  
いろはかうていとまもあつた  
俳諧ふまらるゝある人けおふと  
習ふ時ハかきよの誤なく自ら名  
ある古今未著の書なり

文化十三丙子仲冬補刻

江戸書林

西國橋通吉川町山田佐助  
本石町十軒店英平吉  
神田鍛冶町三丁目北島長四郎



